





南北問題の今日

本山 美彦・田口 信夫 編著

同文館

昭和61年4月25日 初版発行 略称—南北の今日

＜検印省略＞

南 北 問 題 の 今 日

定価 3,300円

編著者	本 山 美 彦
	田 口 信 夫
発行者	中 島 朝 彦

発行所 同 文 館 出 版 株 式 会 社
東京都千代田区神田神保町1-41 千101
電話(東京) 294-1801〜6 振替東京 0-42935

© Y. MOTOYAMA
N. TAGUCHI

印刷：唯 真
製本：トキワ製本

Printed in Japan 1986
ISBN4-495-41861-0

はしがき

一九八六年二月二五日、フィリピンのマルコスはいらの大統領就任式を強行したあと米国に亡命した。二〇年あまりに及んだ強権政權のあっけない崩壊であった。腐敗と汚辱にまみれた政權の、朽ちた巨木の倒壊に似た幕切れであった。世界中の人びとがテレビの画像を食い入るように見ていた。世界中の眼が集中しているまさにその場での亡命劇であった。人はみな、歴史がつき動かされる巨大なエネルギー、それも民衆の底知れぬエネルギーを膚で感じた。

しかし、現代人はまた、民衆のエネルギーが分散し、瓦解してきたあまりにも多くの事例を知りすぎている。熱狂のすぐあとに白けた事態の到来を習性的に察知してしまう。クローニズム（政治、経済界、官僚、將軍の相互依存による政權維持）の形を変えた再生産を哀しくも予測してしまう。先進国の常識では考えられない露骨な米国レーガン大統領のフィリピンへの内政干渉に思いを馳せてしまうからである。

確かに「マルコス症候群」は、第三世界の強権的指導者に大きな影を落とした。フィリピンもその一員である ASEAN（東南アジア諸国連合）はもとより、第三世界のほとんどの指導者は、フィリピンの政治混乱の自国への波及をおそれている。七〇年代以降の経済開発突出の政策がもたらした国内社会の亀裂の深刻さに各国指導者はたじろぎはじめたのである。軍が強力なインドネシア、韓国、タイ、政界主導のマレーシア、カリスマ指導下のシン

ガポールなど、多様に見えてもクローニズムに関しては同根といえる。経済開発の加速はNICs（新興工業国群）という優等生を産み出し、他の第三世界のモデルとなっていた。しかし、社会構造の改革をおざなりにする開発政策が、貧富差、地域差（タイ東北部の所得はバンコクの一二・六％）の拡大を招き、社会不安を深刻化させてきた。

しかも、一次産品輸出のみならず工業化までも先進国依存の構造を強化させられて、近年では先進国の経済停滞をもろにかぶっている。一九八六年のシンガポールはマイナス二％の成長率であった。他のNICsも成長率の顕著な低下に苦しんでいる。そのような状況下で、政治的自由、民主化への要求を、経済開発の恩恵、軍の強圧によって抑え込むという、アメとムチの政策が効かなくなったことを、フィリピンの政変は示したのである。フィリピンのアキノ大統領は「素人による街頭民主主義」を唱えてフィリピン民衆の熱狂的支持をえた。その直前には、一九八五年一月、一〇年ぶりに公選となったタイ・バンコク知事選で「清潔」の二字だけを掲げた無所属のチャムロンは圧勝した。民意よりは各界、そして米国との利害のしがらみ調整に精力を割いてきた玄人政治家が、戦後四〇年にして自らの時代の終りを意識したのである。

にもかかわらず、「マルコス症候群」は、第三世界の軍部に共産化阻止、政界浄化、富の公平な分配という名目のもとに実力行使する格好の口実を与えた。一九八五年一一月のバンコク知事選ではクーデターの予測が強かった。八六年二月のアキノ政権も一種のクーデターの要素をもつ。それにも増して世界の人びとが肝を冷やしたのは、米国の過剰干渉であった。八五年秋のフィリピンの大統領選から八六年二月のマルコス亡命劇まで、終始一貫フィリピンは米国指導者の思惑に自国の命運を託さねばならなかった。かつて米国は南ベトナム・サイゴン反共政権への露骨な口出しにより、ベトナム全土を喪う愚を犯したが、第三世界の軍による政権のコントロールという慣例がなお教条の位置を占めているのである。マルコスの見限りという米国の新政策においてもそれは踏襲されている。

フィリピンの大統領選における事態の推移は世界の人びとに南北問題というものの今日の問題を鮮明に提示した。富の分配の名のもとにマルコスによって強行された旧財閥の解体後、マルコスのクローニーによって、新興財閥が急速に巨大化し、あらゆる分野で独占的権益を築いてしまったこと、しかも、これら新興財閥の政治的工事はマルコス、アキノ両派に保険をかけたものであること、これら財閥による経済支配からの解放を旗印に選挙戦を闘ってきたアキノ大統領でも、国民の圧倒的失業の前に実行段階で財閥解体に手をつけれないこと、加えて、この権益にはすでに日米の巨大資本の強力な力が参画しており、外国からの援助によってしか政権維持のできぬ第三世界の政府では抜本的改革など思いもよらぬものであること、要するに政権交代があっても、反共軍事基地の確保、先進国資本の自由な活動、この二大条件を受諾しないかぎり第三世界の政権の存続は不可能なこと、第三世界の民衆はもとより、先進国の人びとも南北問題のぎりぎりのところにあるドロドロとした政治経済のこわさをテレビの画像で見ってしまったのである。

ひるがえって、わが国の経済学、とくに南北問題を論じる経済学の多くはこれまで何をしてきたのか。豊かで賢明な先進国が、貧しく愚鈍な第三世界に、いかにすれば効率的な経済、技術援助を行えばよいか、そして、先進国の論理に忠実なNICs的行動をどうすれば他の頑迷なより貧しい諸国にとらせることができるのか、のみの論理提出に腐心してきたのではなかったか。全世界の枠組の下で人としての尊厳を奪われつつある第三世界の民衆を、ただ貧民の群れとしてしか位置づけず、彼らのエネルギーが世界政治経済の枠組を突破する可能性について考えてみようとしなかったのではないだろうか。技術主義的経済学の類魔が、私たちの経済学の中で進行している。多くの型の経済学があつてよい。しかし、現にある政治権力構造のみを不変の合理性をもつものと思ひ込む愚だけは避けねばなるまい。南北問題は権力志向の経済学に鋭い反省を迫る領域である。

先進国経済が景気循環のサイクルを描きながらケインズ政策をテコとして持続的成長を続けたのは、技術革新とその残り火が存在していたからである。しかし、その残り火がなくなると量産化がコスト低下に結びつかず、物価上昇と失業増大というハイテク的局面に直面する。この十数年間の先進国経済はまさにこの局面に突入していた。しかし、八〇年代も半ばに入って、シュンペーターのいう「創造的破壊」が急速に進行するようになった。今世紀末には在来技術基盤産業群のシェアが今日の九五%から半分以上の四〇%に低下すると考えられる。先端技術基盤産業群が五%から六〇%へのシェアへと拡大するのである。メカトロニクス産業、新素材産業、バイオテクノロジー産業、エレクトロニクス産業がそれである。事実、このような変化は設備投資面で現実化している。総設備投資に占めるハイテク部門への投資の比率が、八五年の日本の全産業で二四・二%にも達した。電機部門などは、エレクトロニクス、コンピューターなどを中心に七二・四%がハイテク関連投資である。逆に在来型産業の売上高に占める研究開発投資は軒並み五%以下であり、二桁台のハイテク部門と対称的である。

製造業分野におけるこうした大変化と並んで、金融・証券市場の本格的自由化、国際化が急ピッチで進行している。東京は世界の第三の金融センターとなり、ロンドン・ニューヨーク・東京のトライアングルシステムの形成が国際金融の流れを大きく変えつつある。たとえば、証券市場が株式中心から公社債取引市場中心の金融証券市場へと転換した。八五年の株式売買七〇兆円に対して、公社債売買が二千百兆円に達したことからこの大転換の規模が理解できるだろう。

このように先進国産業で進行しつつある巨大な変化が南北問題に七〇年代とは違った様相を与えているのである。奇跡といわれたNICsの成長率は平凡な数字にまで低下した。資金の流れが第三世界から先進国へと逆流するようになった。一次産品市況の極端な悪化に見舞われ、原油ですら例外ではない。工業化も外資排除では成り立たな

くなってしまった。これらの変化は、けっして循環的要因ではない。開発型独裁の命運はつきたように思われる。本書は、世界経済の枠組変化を重視し、南北問題の新しい位置づけを考察しようとするものである。「南北問題の今日」という表題の意図する由縁である。

本書は小野一一郎京都大学経済学部教授の御還暦を祝って門下生によって上梓されたものである。幅広い先生の御視野の幾分の一でも継承できれば、との願いを執筆者一同はもっているが、どの程度成功しえたか。大方の御叱正をお待ちしている。記念論文集は本書のほかに小野一一郎編『戦間期の日本帝国主義』（世界思想社、一九八五年）、杉本昭七編『多国籍企業と重層的統合化』（同文館、一九八六年）がある。

力強い励ましを与え続けてくださった同文館のみなさま、とくに編集部池田勝也氏に心より感謝する。

一九八六年三月三日

編
者

目次

第1章

発展途上国の対外債務累積問題と現代世界経済	3
はじめに	3

一 対外債務累積の基本的メカニズム	4
-------------------	---

1 対外債務問題の原理的考察	4
----------------	---

2 現実における途上国の貿易収支および経常収支の動向	10
----------------------------	----

3 債務累積の構造的諸要因	12
---------------	----

二 現代世界経済と対外債務累積問題	31
-------------------	----

1 現代世界経済において民間銀行貸付がもつ意義	31
-------------------------	----

2 現代世界経済と対外債務累積問題	36
-------------------	----

むすびにかえて——問題解決へ向けての展望	41
----------------------	----

第2章

レーガン政権下の世界銀行

——レーガン戦略の貫徹と途上国の対応——

はじめに.....	49
一 レーガン政権の国際開発諸機関政策.....	50
1 「経済再建計画」と国際開発諸機関政策の「転換」.....	50
2 多国間援助に関する『財務省報告書』.....	58
二 八〇年代前半期の世界銀行.....	63
1 IDA第六次増資.....	65
2 成熟・卒業政策.....	71
3 世銀と金融市場.....	75
三 世銀の本質規定と途上国による改革の方向性.....	82
1 世銀の本質規定をめぐって.....	82
2 途上国の世銀のとらえ方.....	84
四 ま と め.....	88
戦後メキシコの開発戦略と対外債務累積.....	99
はじめに.....	99
一 戦後工業化と対外不均衡.....	101
二 財政・金融政策の変遷.....	112
三 石油と高度経済成長.....	121

第4章 輸出主導型工業化と多国籍企業

——從属的發展の構造分析——

はじめに……………

一 途上国工業化の現局面……………

1 新興工業国（NICs）の定義と範囲……………134

2 輸出工業化の現局面と危機……………137

二 多国籍企業の生産・流通支配と發展途上国……………

1 先進国直接投資——多国籍企業による生産・労働過程支配——の構造……………144

2 直接投資をめぐる最近の論争——「直接投資退化論」と「金融資本化論」……………152

3 多国籍企業による実現過程——販売・輸出——支配……………156

三 從属的輸出工業化と多国籍企業……………

1 NICsと多国籍企業……………160

2 新古典派的成長論の隘路——從属的發展論との対比で——……………173

第5章

NICs 現象をどうみるか……………

一 統合主義と離脱主義……………

二 輸入代替工業化政策への統合主義の批判……………

三 輸出指向型工業化と政府統制……………

183
183
187
192

133

第6章

四	EOIは持続できるか	195
五	米国の政治力学	202
六	工業化の中心	205
多国籍アグリビジネスの世界戦略と途上国	215	
はじめに——課題と視角——	215	
一 多国籍アグリビジネスの世界戦略	217	
二 多国籍アグリビジネスの実態	244	
1 概観	244	
2 食肉	249	
3 酪農	252	
4 穀類	252	
5 油脂	261	
6 野菜・果実	263	
7 砂糖および同関連	265	
8 アルコール飲料	267	
9 熱帯飲料	269	
10 魚介類	271	

三 多国籍アグリビジネスの限界と矛盾——むすびにかえて——	273
-------------------------------	-----

第7章

第三世界における生存維持経済の解体	291
-------------------	-----

はじめに	291
------	-----

一 農村経済解体の三局面	293
--------------	-----

二 農村社会解体の最終局面と「還流型移民」論の検討	301
---------------------------	-----

三 むすび	307
-------	-----

第8章

米国覇権の後退と「企業発展の逆転」現象	319
---------------------	-----

（ゲモノー）

——資源関連多国籍企業の新動向——	319
-------------------	-----

はじめに	319
------	-----

一 石油危機と多角化——メジャーズはそれを望んだか——	320
-----------------------------	-----

二 「企業発展の逆転」現象	328
---------------	-----

三 MA、LOB、レバレッジド・リース	334
---------------------	-----

四 レーガノミックスと八〇年代の世界システム	342
------------------------	-----

第9章

ソ連と第三世界との対外経済関係	357
-----------------	-----

——一九七〇年代を中心とする統計的分析——	357
-----------------------	-----

索

引

はじめに	357
一 ソ連の対第三世界経済・技術協力の実態	358
1 概観	358
2 援助対象地域・国	362
3 部門別援助シェア	364
4 経済協力プロジェクト	365
5 三地域間産業協力	368
二 ソ連の対第三世界貿易の動向と特徴	372
1 概観	372
2 主要貿易相手地域・国別動向	375
3 輸出入商品構成	378
4 経済援助との相関関係	381
三 ソ連の対第三世界軍事輸出と対外貿易	382
1 軍事輸出の実態	382
2 対外貿易における軍事輸出の役割	389

南北問題の今日

第1章 発展途上国の対外債務累積問題と現代世界経済

はじめに

発展途上国の対外債務累積問題は、一九八二年八月のメキシコの金融危機を契機として、いまや現代世界経済における最大の問題の一つとなっている。このような事態の深化にともなって、近年、途上国（あるいは東欧諸国）の対外債務問題をテーマとする論文・著書が数多く輩出しているが、そのなかみはどちらかといえば、「国際金融不安」という国際金融論的視点から書かれたものが多かったように思われる。事実、私が最近執筆した論文⁽¹⁾もこのような角度から書かれたものであった。

しかしこの問題は厳密に検討すると、単に「国際金融不安」という側面だけではとらえられない、もっと複雑な側面をもっている。それは、この問題が単なる民間商業銀行と発展途上国との関係だけではなく、貸付を通して南北間の貿易関係あるいは世界経済全体にも重大な影響をおよぼすというもう一つの側面をもっているからである。

本章はかかる視点から、発展途上国の対外債務問題を現代世界経済というトータルなフレーム・ワークの中でと